

下北半島むつ市川代の尖頭器について

齋藤 岳¹⁾

Point Found at Kawadai, Mutsu City, the Shimokita Peninsula

Takashi SAITO

Key words : 寄贈品、むつ市川代、有舌尖頭器、立川型、研究史、有茎石槍、時期の検討

1 はじめに

青森県は本州北端で北海道に面するという地理的な位置から、本州と北海道との文化交流を考える上で、重要な位置を占めており、様々な資料が注目されてきた。

当館の所蔵するむつ市川代採集の尖頭器については、芹沢長介氏(芹沢 1967)によって実測図が紹介された後、「東北地方唯一の立川型有舌尖頭器」(芹沢 1974)として、写真が広く紹介された資料である。「青森県川代駅付近(むつ市)」が採集地とされている。有舌尖頭器(注1)は縄文時代草創期の代表的な石器である。当館は考古展示室で縄文時代草創期の資料として借用展示し、所蔵者であった、むつ市大畑の大安寺住職長岡俊應氏より2002年に寄贈を受けた。登録番号は1881番で、資料台帳には出土状況等の詳細は不明と記録されている。しかし借用展示品について作成していた「借用資料カード」には、2002年3月8日付けの聞き取り記録として「この石器は、先代の時に持ち込まれたもの。たぶん、畑作業中に出てきたものを、檀家が見つかり、持ってきたのではないかと思うが、はっきりしたことは、今となってはわからないとのこと。」というメモが残っている。

この資料については、鈴木克彦氏によって実測図が紹介されている(鈴木 2005)。しかし掲載されたのが町史のためか、実測図以外の観察結果は記されていない。そこで、本稿では立川型有舌尖頭器の特徴とされる茎部の両側縁の磨痕の有無等の観察結果を記載したうえで、研究史上の評価を振り返り、若干の考察を加えることとしたい。

2 資料の図・写真と観察結果

鈴木(2005)の図をもとに、フィッシャーやリング等を一部改変して図1に示す(注2)。台帳記載の大きさは長さ7.66cm、幅2.45cm、厚さ0.77mm、重さ14.5gである。珪質頁岩製で、上部は灰黄褐色で直径1mmほどの浅黄橙色の不純物が入る。下部は淡黄色で、より軟質であるため、礫皮に近い部分の可能性もある。器表面は、いくぶん光沢をもち、若干風化しているように見える。先端部から長さ11mm、幅1.5mm程の槌状の剥離がある(注3)。両側縁とも一直線とはならず、細部加工の打点付近が湾曲する。写真に示すように茎部の両側縁には磨痕等はみられない。

3 研究史上の評価

芹沢長介氏によって本資料が公表されたのは1967年である(芹沢 1967)。東北地方の有舌尖頭器としては、山形県鳥谷沢のものが知られていた(加藤 1965)が、資料の極めて少ない時期であり、東北地方を代表する有舌尖頭器として紹介されたといえる。東北地方の旧石器時代の編年表である表3で芹沢氏は「(6)有舌尖頭器を伴出するもの」として「山形・鳥谷沢」と「青森・川代」をあげたのであった。なお、芹沢氏は前年に新潟県中林遺跡の報告の中で有舌尖頭器の集成と編年を発表している(芹沢 1966)。そして立川ポイントの一群と本州の有舌尖頭器との関連について述べている。川代の資料については記載がなく、青森県内の出土例としては「発見者又は報告者」が音喜多富寿氏の「八戸市北沼丘上八太郎」のものが記載されている(注4)。

加藤稔氏も芹沢氏の編年を補訂した「東日本における旧石器文化の編年対比表」で「(6)有舌尖頭器を伴出するもの」として「山形・鳥谷沢」、「青森・川代」、「山形・津谷」をあげている(加藤 1969)。本資料は1960年代の東北の有舌尖頭器を代表する貴重な資料であったといえる。

その後、芹沢氏の研究(芹沢 1966)は大井晴男氏から、石刃技法を伴う立川ポイントと伴わない中林遺跡の有舌尖頭器は系統を異にする等の批判をうける(大井 1970)。

そして、芹沢長介氏は1974年、「東北地方唯一の立川型有舌尖頭器」として、本資料を写真紹介する。

これにより、川代の尖頭器は立川型としても紹介された。しかし、その後は論文等で取り上げられないケースが出てくる(白石 1976 など; 注5)。その後、東北歴史資料館の展示図録で立川型有舌尖頭器の分布図として北海道を中

1) 青森県立郷土館 主任学芸主査(〒030-0802 青森市本町二丁目8-14)

心として本資料の採集地点の下北半島を含むものが作成される（東北歴史資料館 1981）。

また栗島義明氏は、有舌尖頭器の編年のなかで、川代の尖頭器を最古段階の第Ⅰ期においた（栗島 1984）。加藤稔氏は立川系の B 形態群として形態分類表に取り上げた（加藤 1986）。

そして、長井謙治氏は石器製作の動作と斜行剥離の関係性を研究したうえで「川代からは、辺に直交する剥離を基調に、RL—斜行剥離と LR—斜行剥離が同居する有舌尖頭器が報告されている」と述べ、本州に特徴的な右肩あがりの斜行剥離と北海道に特徴的な左肩あがりの斜行剥離が同居すると述べた（長井 2009）。

青森県内においては、旧石器または縄文時代草創期の資料集成で、川代の尖頭器は芹沢長介氏の紹介（芹沢 1967・1974）を引用し記述されていく（岩本 1979・三宅 1981・市川 1983・福田 2000 など）。そうした中で橋善光氏が『むつ市史』の中で、「むつ市大字関根字川代の下北交通川代駅付近で、かつて砂鉄掘削作業の時代（昭和二十年後半から三十年代にかけて）に採集された石器」であるとして、採集状況を記述しているのが注目される（橋 1994）。

4 おわりに—帰属時期についての検討ほか—

青森県内では、石槍は早期以降も使用され、縄文時代前・中期などにも有茎石槍が出土する。本資料は採集品であり出土層位が不明のため、最後に筆者なりに帰属時期を検討したい。有茎石槍にも押圧剥離が用いられることもあり、剥離が斜行するものがある。筆者は、青森県内の前・中期にみられる茎部が長く左右は非対象で茎部へと向かう張り出し部分（かえし部）の片方が尖るものは、類例の多い北海道との関連で考えた（齋藤 2002・2007）。他の形態の有茎石槍もあるが、川代の尖頭器とは形や大きさが、より異なっている。そこで参考例として（珪質）頁岩製で川代の尖頭器とほぼ同じ大きさの約 8cm の中期末の青森市内丸山遺跡の出土例（注 6）、前期末主体の下北郡風間浦村沢ノ黒遺跡出土例、あわせて後期前葉の可能性の高い剥離が斜行する六ヶ所村大石平遺跡の出土例を図 2 に示す。

比較すると川代の尖頭器は左右の非対象等はあるものの、茎部の作り出しは明確でありながらも短いのが特徴的である。また器表面の風化状況では、筆者がこれまで数多く観察した縄文時代前期以降のものよりも風化している。

一方、研究史を振り返ると、前述したように縄文時代草創期に詳しい多くの石器研究者から草創期の有舌尖頭器として認められてきたことを確認できた。否定的な材料・背景である、北海道と本州をつなぐ資料が待ち望まれていた状況の中で資料紹介されたこと、北からの伝播を考える研究者に引用されてきたこと、採集品であること、採集地が砂鉄採取の砂地であったことから通常よりも石器表面の風化が早い可能性はある等について考慮しても、縄文時代草創期ではないとする根拠とはならない。縄文時代早期以降の有茎石槍の可能性は排除できないものの、茎部の長さなどの形態差、器表面の風化状況、そして何よりも多くの石器研究者の目で草創期の有舌尖頭器として観察されてきたことから、筆者は従来どおり草創期の可能性が高い資料と考える。

また、茎部側縁に磨痕は見あたらないが、立川型の特徴とされる点は研究者によって異なっている（栗島 1984；注 7）。芹沢長介氏は川代の尖頭器を紹介した時の著作で「基部が長方形に近い形」が立川型の特徴とした（芹沢 1974）。その特徴を形に求める立場からすれば立川型の有舌尖頭器と認定することは可能である。

青森県立郷土館は、考古学の研究史を彩る資料をたくさん所蔵しており、考古資料の図録（青森県立郷土館 2001）を作成した 2001 年以降の寄贈品も増加している。今後も、重要な資料の紹介を続け、活用を図っていきたい。

謝 辞

本稿を作成するにあたって、青森県考古学会会長の福田友之氏から、ご教示を賜りました。深く感謝いたします。

（注 1）有茎尖頭器の方が適切とする意見（栗島 1984）があるが、用語として定着している有舌尖頭器を用いる。

（注 2）資料とともに保管されていたトレース図のコピーをもとに一部を改変した。石器製作技術や縄文時代草創期の石器群に詳しい研究者により、実測図が改めて作成され、公表されることを期待する。

（注 3）御堂島正氏の述べる衝撃剥離の「彫器状剥離」（御堂島 2005）と考えられる。

（注 4）八戸市博物館の所蔵（音喜多コレクション）する八戸市日計遺跡の有舌尖頭器（八戸市博物館 1992）と考えられる。芹沢氏は「北海道から出土する立川ポイントの一群と本州の有舌尖頭器との関連については、ほとんど手がかりさえつかめなかったといえる。有舌尖頭器という形態上の特徴からみて、おそらく両者には何らかの関連があると思われたのであるが、私たちにはこれといった確証が掴めないでいた。それには、東北地方からの発見例がとぼしいという事情が、その大きなひとつの理由をなしていた。ところが、こんど発掘された中林の有舌尖頭器のなかには、立川ポイントにかなり近いものをいくつか見出すことができるのである。（中略）しかも、中林の A₂ 類の基部側辺には、立川ポイントと同じような特殊な磨痕がみとめられている。また八戸市八太郎出土の一例は、鋸歯状縁を持つ A₂ 類もしくは A₄ 類であった。東北地方および北海道南部の資料が増加したときは、津軽海峡をはさむ両地の関連がさらに明らかになると思われる。」と記している（芹沢 1964）。その集成を補完し、

しかも氏自身が深くかかわった北海道立川遺跡のものに形態が類似している川代の尖頭器は待望の新資料であった可能性がある。なお、東北地方では他に山形県と福島県で各3例が同著で紹介されている。また、中林遺跡は本ノ木遺跡に近接しており山内清男との間に起こった「本ノ木論争」に関係して芹沢氏によって行われた調査として有名である。「本ノ木論争」における芹沢氏の立場は有舌尖頭器の編年観等に反映したとされている(橋本 1988)。なお、加藤稔氏も「東北地方北半から北海道では有舌尖頭器がおそくまで土器と結びつかない事情へとつながるものであろう。例えば、青森県むつ市川代で、I B形態の立川型尖頭器が採集されている(中略)。土器は発見されていない。本ノ木・中林・津谷などと同一である。」と述べている(加藤 1986)。

(注5) 有舌尖頭器に関する発掘資料も増え、土器型式や石器組成の中で研究されるようになった事も原因と思われるが、本州と北海道との有舌尖頭器の関連性について積極的な立場の研究者が川代の尖頭器を論文等に取りあげ、消極的もしくは判断を保留している研究者は取り上げていないようにも思われる。白石浩之氏は「本州地方と北海道地方の有舌尖頭器の関連については、芹沢や栗島のように、積極的に本州と北海道の有舌尖頭器を相互に関連させる説をとるのに対し、大井や稲田はその関連性について消極的な見解をとっている。したがってこのことについては再度詳細に検討する機会を得ようと思う。」と述べている(白石 2001)。川代の尖頭器をとりあげた加藤稔氏も栗島氏の北からの直線的な南下論を批判しながらも「東日本の細石刃石器群・神子柴型石器群・有舌尖頭器群は、おそらく人々の移動を含んだ北東アジアからの北海道および日本海沿岸諸地域を経て南下し定着した文化相の一部と思われる」としている(加藤 1986)。青森県内で積極的に旧石器研究を行い著作に川代の尖頭器をとりあげた岩本義雄氏も、「いわゆる中石器時代的様相(中略)を呈する遺跡では、石器の製作技法や形態の源流を北方系文化に求められる。例えば、川代遺跡で発見された有舌尖頭器の類似品は、北海道の八雲町上八雲第二遺跡、磯谷郡蘭越町立川遺跡第Ⅲ地点、紋別郡遠軽町タチカルシナイ遺跡などにみられるものである」と述べている(岩本 1978)。

(注6) 後に三内丸山遺跡に統合される小三内遺跡第8号住居跡の出土品で同住居跡から余市系土器も出土している。

(注7) 栗島義明氏は吉崎昌一氏・芹沢長介氏・杉原荘介氏は立川型の特徴について、それぞれ異なる見解を示すと述べた(栗島 1984)が、各氏がそろっての1974年のシンポジウムが書籍化された本(貝塚ほか 1977)では「もっとも注意すべき特徴は、わずかに柄の両側辺が磨かれていることだ。これが立川型の有舌尖頭器(立川ポイント)を決定づける重要な要素である」として吉崎昌一氏の見解に沿った解説がなされている一方で「北海道に濃い分布をみせるほか東北地方の一部にまで達する」と川代の尖頭器(と思われる資料)に言及している。

引用・参考文献

- 青森県教育委員会 1985『大石平遺跡発掘調査報告書』(青森県 90集)
青森県埋蔵文化財調査センター2007『沢ノ黒遺跡』(青森県 435集)
青森県立郷土館 2001『青森県立郷土館収蔵資料図録 第3集・考古編(2)』
青森市教育委員会 1994『小三内遺跡発掘調査報告書』(青森市 22集)
市川金丸 1983「旧石器時代」『青森県の考古学』35～89頁 青森大学出版局
岩本義雄 1978「下北半島の旧石器時代遺跡」『下北半島の歴史と民俗』75頁 下北の歴史と文化を語る会編 伝統と現代社
岩本義雄 1979「青森県における縄文文化以前の文化に関する研究史」『大平山元 I 遺跡発掘調査報告書』3～7頁 青森県立郷土館
大井晴男 1970「いわゆる有舌尖頭器について」『北海道考古学』第6号 119～135頁
貝塚爽平・加藤稔・鎌木義昌・杉原荘介・芹沢長介・吉崎昌一・渡辺直径 1977「立川型の有舌尖頭器」『日本旧石器時代の考古学』324頁
加藤稔 1965「東北地方の先土器時代」『日本の考古学 先土器時代』217頁の図43及び221頁 河出書房新社
加藤稔 1969「東北地方の旧石器文化(前編)」『山形県立中央高等学校研究紀要』第1号 52頁
加藤稔 1986「関東・東北地方の有舌尖頭器」『考古学ジャーナル』258号 11～15頁
栗島義明 1984「有茎尖頭器の型式変遷とその伝播」『駿台史学』50～82頁
栗島義明 1991「『本ノ木論争』から学ぶもの(一)」『埼玉考古学論集 設立10周年記念論文集』127～154頁 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
齋藤岳 2002「交流と交易」『青森県史 別編 三内丸山遺跡』207頁 青森県
齋藤岳 2007「三内丸山遺跡の黒曜石製石鏃の搬入形態について」『特別史跡三内丸山遺跡年報』—10— 28～41頁
白石浩之 1976「先土器終末から縄文草創期前半の尖頭器について(上)」『考古学ジャーナル』126号 5～12頁
白石浩之 1976「先土器終末から縄文草創期前半の尖頭器について(上)」『考古学ジャーナル』127号 7～13頁

- 白石浩之 2001『石槍の研究 旧石器時代から縄文時代初頭期にかけて』277頁 株式会社ミューゼ
- 芹沢長介 1966「新潟県中林遺跡における有舌尖頭器の研究」『日本文化研究所研究報告』2号 1～67頁（注4で41頁部分引用） 東北大学文学部附属日本文化研究施設
- 芹沢長介 1967「洪積世の文化（旧石器時代文化）」『東北の歴史 上巻』1～6頁 吉川弘文館
- 芹沢長介 1974「石器の地方色」『古代史発掘 1 最古の狩人たち 旧石器時代』119～120頁 講談社
- 芹沢長介 1986「有舌尖頭器について」『考古学ジャーナル』258号 2～5頁
- 鈴木克彦 2005「大畑町川代発見の有舌尖頭器」『川内町史』24頁 川内町
- 橋善光 1994「川代遺跡」『むつ市史 原始・古代・中世編』26頁 むつ市
- 東北歴史資料館 1981『旧石器時代の東北』39頁 東北歴史資料館
- 長井謙治 2009『ものが語る歴史⑧ 石器づくりの考古学—実験考古学と縄文時代のはじまり—』45頁 同成社
- 橋本勝雄 1988「縄文文化起源論」『論争・学説 日本の考古学 先土器・縄文 I』119頁 雄山閣出版株式会社
- 八戸市博物館 1992『音喜多コレクション目録』10頁
- 福田友之 2000「青森県の縄文時代草創期関連の遺跡」『東北町長者久保遺跡・木造町丸山遺跡』25～29頁
- 御堂島正 2005「石鏃と有舌尖頭器の衝撃痕」『石器使用痕の研究』133～148頁 同成社
- 三宅徹也 1981「東北各県の旧石器研究の歴史と現状 (1) 青森県」『旧石器時代の東北』46～48頁 東北歴史資料館

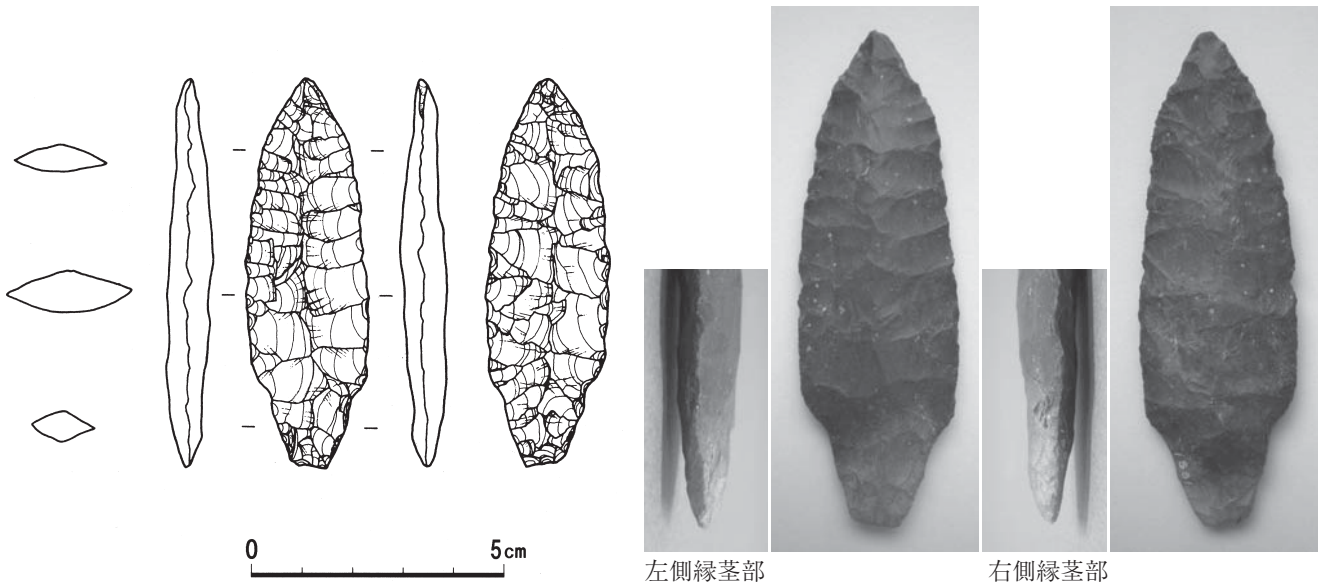


図1 むつ市川代の尖頭器

(参考資料)

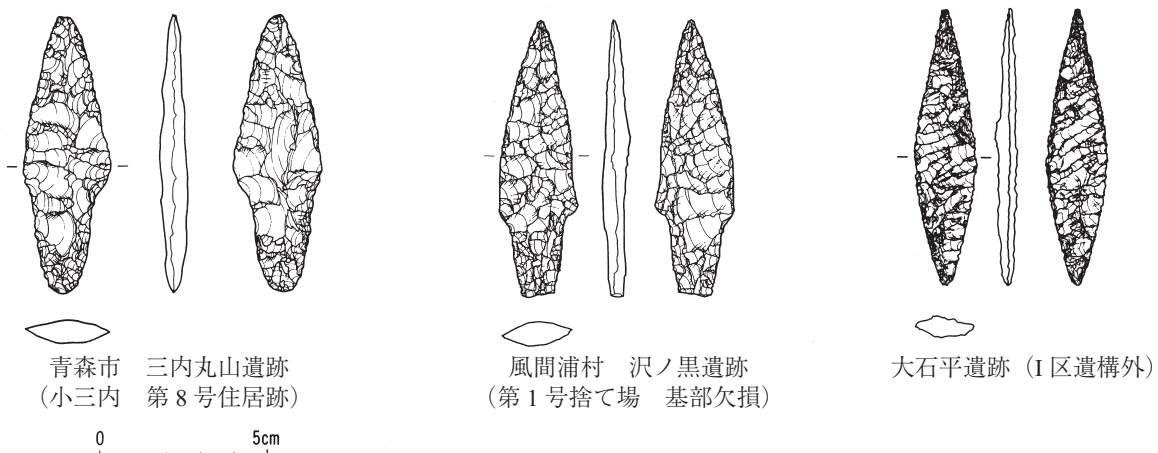


図2 縄文時代前期以降の参考資料